

青丘文庫研究会 月報

No.296
2020年4月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <https://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>
年間購読料 3000 円。在日朝鮮人史研究関西支部会費、5000 円/年 (雑誌3冊を入手できます。)

<巻頭エッセイ①>

朝鮮人と金沢愛宕遊郭について

砂上 昌一



金沢愛宕遊郭は現在の東の茶屋と言われ金沢の伝統的な街並みに隣接していた。昭和10年代には市内には4つの郭があった。東郭、北郭、西郭、主計町の四郭の芸妓たちが、加賀友禅の宮崎友禅斎 (加賀友禅の祖) の二百年祭に豪華な衣装で行列をした。当時の行列の模様を新聞は次のような見出しを立てている。「豪華を塗る極彩色 友禅緑に映えて優雅の衣装に鳴物賑はしく 四郭芸妓の十二月行列」行列の芸妓は九十名であったと書かれている。(北國新聞 昭和10年5月17日付)

この「ひがし」、「にし」の郭の前身を茶屋町と言い、12代藩主前田斎廣の時代1820年代に茶屋町が設置された。当初「ひがし」の茶屋町は浅野川に近い場所に設置された。浅野町茶屋町と言われた。「にし」の茶屋町は犀川のはずれに設置された。その目的は治安対策や風紀取締などであった。このような場所では見世物小屋や曲芸などの芸能を楽しむ人々が集まって大いににぎわっていたことだろう。遊郭などの一般的な傾向として四方で囲むなど世間との隔離されていた。この二つの茶屋町でも同じように世間とは隔絶されていた。

愛宕遊郭は「東」や「西」の遊郭とは一段低く見られていたようで、前述の記事にもその名前は出てこない。庶民の遊郭として存在していたようである。昭和4年の「日本遊里史」の付録に掲載されている「日本全国遊郭一覧」では金沢市内には東廓、愛宕、西廓、石坂、北廓が記録されている。東廓と愛宕廓は愛宕町に隣接していることがわかる住所だ。東廓は愛宕町1～3番地、愛宕廓は愛宕町1, 2ノ一部4番町となっている。東廓はこの5つの廓のなかでも貸座敷数75、娼妓17人と西廓に次いで2番目であった。愛宕遊郭の貸座敷30、娼妓15人であった。この数字からみて当時の愛宕遊郭はそれなりに繁盛していたのだろう。『日本全国遊郭一覧より』それでも先ほどの宮崎友禅斎の式典の記事には載っていない。それは遊郭が客層と関係したと思われる。格式の高さを誇る遊郭とそうでなかった庶民の対象の遊郭との差が存在していたのだろうか。愛宕遊郭は庶民や朝鮮人相手の店が多かったと思われる。

昭和10年頃には石川県内の朝鮮人有業者数は1600人余りとなった。多くは金沢市内に定住するようになった。その結果日常的な静いや争いが新聞記事で見られることが多くなった。そのような中でも愛宕遊郭の名前が記事にのぼるようになった。

「値切って拒まれる 愛宕で暴れ回る 鮮人、芸妓を殴りつけて捕まる」(北國新聞 昭和8年3月4日付)。愛宕遊郭朝鮮楼に朝鮮人が朝鮮芸妓に2圓50銭で泊めろといったが撥ねられたので朝鮮人芸妓を殴りつけたという。この遊郭の楼主は朝鮮人であった。この記事から愛宕遊郭の中には朝鮮人相手の遊郭もあったことがわかる。

「借金も免除して 署長公許の自廃 更生の愛宕朝鮮楼芸妓 温かい救いの手を待つ」(北國新聞 昭和10年8月3日) この楼主も朝鮮人であり無理やりに連れてきた朝鮮の娘に対して暴行を働くなどして警察に検挙されたという記事。更生させようと5人の朝鮮人娘の借金をないものとして警察署長がはからったという記事である。しかし娘たちには働き口が見つからず救いの手を差し伸べてほしいとのことであった。同じ日の同じ紙面に石坂遊郭での出来事が大きくトップ記事で載っている。「水攻め煙管攻め 石坂の惨虐な生地獄日進楼主が抱妓に死の苦檻 断乎営業停止の処分」と(北國新聞 昭和10年8月3日付)。朝鮮遊郭だけでなくその他の遊郭でも芸妓への暴行があったのだろう。そのほか朝鮮人芸妓の悲惨な出来事などもニュースとして取り上げあげられることが多くなった。「毒を吞んで 他人の家へ転げ込む 例の七尾遊郭の朝鮮芸妓」失恋しての自殺であったが、一命を取り留めたという記事である。

これらの記事からわかるように日本に働きにきた朝鮮人女性たちが仕事もなく遊郭に流れ着いたのだろう。その遊郭は東や西の遊郭ではなく主に愛宕遊郭などに落ち着いていたのだろうと思われる。庶民の遊郭と言われた愛宕遊郭で働く女性に朝鮮人女性が多かったと考えられる。当然のように朝鮮人男性もまた一時の慰めを求めて愛宕遊郭に集まってきた。そこで愛宕遊郭は東や西の廓と違った色合いの遊郭となっていたのだろう。

<巻頭エッセイ②>

パトカーに乗ったよ

足立龍枝



韓国で4回もパトカーに乗ったというと、「何で〜?」と聞かれる。理由はいろいろだけれど、思い出すままに書くことにした。

韓国に行き始めてちょうど10回目、1980年代。日本人のパスポートが、アジアで重宝がられたころだ。無防備だったのが一番の理由だが、釜山でパスポートを亡くしてしまった。

列車の都合でソウルまで行き、南大門通りの「ソウル市警・・・」が以前から目についていたので届けた。そこは、派出所ではなかったようで、私服の警官2人が南大門警察署まで送ってくれた。覆面パトカーだったように思う。乗っていて、若いお巡りさんが冗談のように、窓から手を伸ばして、屋根の上の「ピーポ・ピーポ」を鳴らそうとするのがおかしかった。

南大門警察は、現在も同じ場所にある。ソウル駅の真ん前にある。広い捜査室だったなあと、ソウル駅に

行くと、どきっとした部屋の隅々まで思い出している。

次は30年ぐらい前、植民地時代に地方都市全州（チョンジュ）で育ったという人の希望で、知人と3人でその地を訪れることになった。

にぎやかな通りの派出所で聞いてみたが、何しろ子どものころの思い出が頼りだから大変。お巡りさんも困り果て、とにかく、西の方に山が見えたという思い出に近そうなところまで、パトカーで送ってもらった。しかし、何もかも変わっていて、結局、ここという場所は見つからなかったように記憶している。

その後、何回か全州に行く機会があるが、地図と比べてみると、小さな全州川を渡ると、全州神社のあった多佳公園をはじめ、低い山が続き、「山が見えた」というのは、そのあたりだったのかと思う。

そして、15年ぐらい前、一人でチェジュのウォーキング大会に参加した。現在も続く「70里菜の花コッキ（ウォーキング）大会」だ。スタートは、ワールドカップ競技場。一周道路の歩道を東へ歩き、ターンして海岸沿いのウェドルゲの横を通り、競技場に戻ってくるという往復10キロのコース。

その時に宿泊したのが、西帰浦の高台にある「グッドインホテル」。あとにできた「李ジュンソップ美術館」とは目と鼻の距離だ。西帰浦の海が目の前に見えた。後方にはハルラ山の中腹辺りが見え、分かり易いところだと思った。

そして、次の年だったかにも大会（5キロコース）に参加した。済州市から東まわりで海の見える辺りで降りれば簡単にホテルに着くと安心してた。ところが、出発が遅れたせいもあって、日が暮れて真っ暗になってしまった。目印にしている海も山も見えない。バス停の名前なんて考えてもいなかった。終点がどこかもわからない。仕方がないので、ちょっと賑やかそうなところで降りることにした。けれども車も通っていないし、人も歩いていない。うろうろしているうちに、ラッキーなことに、ロータリーに出ることができた。ホテルがどこかは分からないが、運よくパトロール中のお巡りさんを見つけた。ホテルの名前を言ったけれど分からない。その時、相方のお巡りさんが、ロータリーのはるか向こうに停まっているパトカーの中で待機しているのが見えた。そこに乗せてもらうことになった。

パトカーから、あちこちホテルの位置の問い合わせが続いた。やっとホテルが見つかった。日本で韓流ドラマがブームになりかけていたころだったようで、ホテルまで送ってもらう間、若いお巡りさんが、いろいろドラマのことを尋ねてくれたが、よくわからなくて申し訳ないことだった。

そして、4回目。先日（6月末）、またまた済州でのこと。目的は、海女博物館とその周辺に保存されている海女たちが立ち上がった抗日運動の地を訪れる半日コースを考えた。

いつも乗る観徳亭（カンドクチョン）の前からのバスなら、博物館まで直行するが、その日は別のコースで行くことにした。ちょっと高いけれど、急行バスで約1時間、「細花里（セファリ）」まで行き、乗り換えるコースだ。

細花里には、日本人巡査（田口）と海女たちが直談判して、海女たちの要求に応じざるを得ない状態にさせた歴史がある。抗日運動の最重要地だといわれている。

乗り換えバス停「細花里」で降り、喫茶軽食店で昼食をとることにした。店の2階の道路が見える側に座った。とたん、驚いた。目の前に見えるのは「済州歴史紀行」に書かれ、今日、博物館の後で探そうと思っていた派出所だった。

1932年の海女抗日運動から80年余り経っているが、派出所の位置は、当時と同じだと思う。バス道路から直角に曲がった道路は、当時、シジャンが開かれ、抗日海女記念館のあるところからシジャンまでは、海女たちが示威行進したところだ。中心になった女性「夫春花（プチュンファ）」は、今月（6月）の抗日運動家に掲げられていた。

お巡りさんの出入りが頻繁だ。昼食時だからかな？道路沿いには、碑石が二つ見えた。一つは海女抗日運動だが、もう一つは、四・三に関係した碑石だと分かった。

食後、博物館へ行くには左右どちら行きのバスに乗ればいいのかだけは聞かなくてはと思って派出所へ。ちょうど入り口にいた女性お巡りさんに聞いてみた。日本人だと分かったので、バス停の話はしないで、いきなり「息子が大分大学に留学しています」と話しかけられた。「九州ですね」と言うと、大喜びだった。

碑文の写真を撮ったりしている間に、女性お巡りさんは中へ入り、話がまとまったようで、博物館まで

パトカー送ってもらうことになった。そんなに遠くはなかったが、初めてのコースだったので大助かり。
今日（7月2日、2019年）、済州市東部警察署 旧左（クジャ）派出所宛にお礼状を送った。

第320回朝鮮近現代史研究会 2019年7月14日 「台湾の4つのこと」 鈴木常勝

1、 台湾老兵のこと

「朝鮮戦争に参戦した台湾人がいた」ことを、2017年の台湾滞在中に知って、びっくりした。「台湾人はなぜ朝鮮半島の戦場に行ったのか？」「何のために朝鮮戦争に参戦したのか？」

ボクの頭の中には、台湾と朝鮮戦争を結びつける回路がなかった。

台湾出版のわずかの本（関連書は3冊しか探し出せなかった）でたどってみれば、朝鮮戦争に参戦した台湾老兵とは、台湾籍「日本軍軍属」や、戦後の台湾で騙されて「国民党軍」兵士に編入された若者たちだった。

戦中「日本軍」によって中国大陆に送られた台湾青年は、日本人兵士と共に「国民党軍」を敵にした。

日本敗戦後、彼らは海南島に留め置かれ（日本軍は彼らを見捨てて帰国した）、「国民党軍」に編入された。国民党軍兵士として、「中国共産党軍」を敵とした。

国共内戦で国民党軍は負け続け、かろうじて生き残った国民党軍兵士は「共産党軍」の捕虜となり、「共産党軍」に編入され、「国民党軍」を敵とした。

国民党政府が台湾に逃げ込んだ後、台湾人兵士は「台湾解放」（台湾進攻）のため、台湾対岸の福建省に集められた。1949年の中国建国後、共産党軍は「人民解放軍」と名乗り、台湾人兵は人民解放軍兵士となった。

朝鮮戦争が勃発し、アメリカ軍第七艦隊が台湾海峡を封鎖し、「人民解放軍」の台湾進攻は不可能になった。台湾人兵士は「抗美援朝」の「中国人民志願軍」兵士として朝鮮に送り込まれ、「アメリカ軍」（国連軍）を敵とした。

朝鮮戦争停戦後、アメリカ軍捕虜となった台湾老兵は、「中国へ帰るか、台湾に戻るか」の選択を迫られた。中国側捕虜約1万6千名のうち、中国を選んだ者約6千名、台湾を選んだ者約1万名。台湾出身でも中国帰国を望んだ者もいた。

第二次大戦直後の台湾で、国民党は台湾の若者をだまして「国民党軍」に編入し（推定で1万5000名）、台湾の軍港・高雄から中国大陆に送り込み、国共内戦の前線に立たせた。そして、負け続ける「国民党軍」の矢面に立たされ、戦死、餓死以外の者は「共産党軍」の捕虜となった。

その後の流転は、先に述べた元「日本軍籍」の台湾老兵たちと変わりなかった。

朝鮮戦争停戦後に台湾の戻った老兵たちの境遇も苛酷だった。帰国当時は、中国を拒否した「反共の勇士」とたたえられたものの、「人民解放軍兵士」の前歴ゆえに、反共体制、蒋介石の軍事独裁下の台湾では、真実を語る術もなく、安定した生活は望めなかった。

一方、中国に帰った台湾出身兵士は、「国民党軍兵士」の前歴ゆえに、政治運動が起こる毎に、「出身が悪い」と糾弾的にされ、世間の下層で目立たぬように暮らすのが、せめてもの「幸せ」という苦労続きの晩年を過ごした。

結局、日本、中華民国、中華人民共和国のいずれもが、彼らを利用し、見捨てた。

「なぜ、台湾老兵に代表される台湾人は、こんな理不尽な人生を送らなければならないのか？」という、たった一人の台湾人・許昭榮（1928年生まれ。43年「日本海軍特別志願兵第二期」）の憤りが、細い一条の光、数冊の本、そして高雄市旗津にようやく建設された「戦争と平和記念館」となって、台湾老兵の存在を、今のボクたちに伝える。

だが、彼自身は「台湾老兵の苦悩の歴史を明らかにしない」中華民国政府や自治体、「老兵に無関心な現代の台湾人」に対する義憤の余り、2008年5月20日、抗議の焼身自殺により81歳の人生を終える。

2、蓬萊米のこと

現在、「日台の架け橋・百年ダムを造った男」（日本語伝記本の書名）として、八田與一（はったよいち）が持ち上げられている。「台湾総督府の技師であった八田は、当時東洋一とされた烏山頭（うさんとう）ダム建設の設計と建設に携わった。水不足と塩害に悩む台湾南西部の嘉南平野に巨大ダムと灌漑施設を十年がかりで作り、今も地元農民から慕われている」という「美談」が流布され、「国際人・八田」が誕生した。

「総督府の役人」の業績が「国際人」としての評価になるのか？

ダムと灌漑施設の完成で、地元農民は本当に生活が豊かになったのか？

そうではないことを、灌漑施設の完成後に起こった1930年前後の台湾農民運動が物語っているが、それは「美談」には含まれない。

ダム完成後、サトウキビと蓬萊米の増産で利益を得たのは、日本人資本の製糖会社と日本帝国ではないのか？ 蓬萊米とは「日本人の口に合う」ように「品種改良」された台湾生産の米。日本に移出するために作った商品作物（同時期の朝鮮米も日本移出用が多いとのこと）。貧しい台湾農民が食べていたのは、在来米（インディカ種）やサツマイモ。

戦前の日本帝国・台湾総督府と戦後の国民党政府に弾圧されて、矢内原忠雄や布施辰治が連帯した台湾農民運動は、1930年代以降壊滅した。台湾人が農民運動の苦闘を忘れたと思われる今、「国際人・八田」が誕生している。

今は台湾人も普通に蓬萊米を食べているという。ボクも台南市に住んで蓬萊米の「美味」を味わいながら、台南の周囲に広がる嘉南平野をめぐりつつ、烏山頭ダムの「美談」をさらに吟味しようと、目論んでいるのだ。

3、朱實さんのこと

1982年8月初めから1985年2月末まで中国に留学し、北京と上海で中国語と鍼灸の勉強をした。「うまくならない中国語」に絶望して、留学中断も考えた。「大学生時代アルバイトでした紙芝居を中国語の練習に使おう」と思いつき、中国の子ども相手に紙芝居を始める。子どもたちの反応が素晴らしい。漫画紙芝居を笑って盛り上げてくれるし、中国語の言い間違いを直してくれる。こちら度も胸がついて、へたな中国語をごまかしつつ話を進める。

シルクロード、雲南、延安などの辺境から北京天安門広場、上海の路地裏まで、紙芝居を持って出かけ、子どもを見れば、街角紙芝居劇場の始まり。帰国後、紙芝居体験を本にし『上海ちゃんぽん』と名付けて出版した。それを読んだ「上海市日本文化学会常務理事」の朱實（しゅじつ）さんが、『日本経済新聞』1987年7月9日のコラムでほめてくれた。

その文章に背中を押されて、今に至るアジア紙芝居実演をほぼ35年間（1983～2019）、ボクは続けてきた。ここ数年は1年のうち3、4カ月は台湾の台南市に住んで紙芝居巡演。

上海人だとばかり思っていた朱實さん（筆名・瞿麦 くばく）が、1926年9月30日に台湾・彰化に生まれたことを、つい3年前、2017年に知った。

朱實さんは終戦直後の台湾で、「台湾人自身の文化を創る」ため、先輩の左翼作家、「人間的社会主義者」楊逵（ヤンクイ、ようき 1905～85）と交流し、「若き作家」として文学活動に打ち込んだ。国共内戦で負け続ける国民党は、台湾でも大衆運動を弾圧し、ブラックリストに挙げられた朱實さんは、1949年9月、他人の名で基隆港から天津に脱出した。翌月10月1日は、中華人民共和国建国宣言の日だった。（楊逵は49年4月に「政治犯」として国民党に逮捕され、51年から61年まで太平洋の離島・緑島の監獄に隔離収容された）

戦後の国民党政府は、台湾民主化を主張した朱實さんを「政治犯」扱いにした。朱實さんや楊逵の親族は「政治犯」家族として、戦後ずっと、周囲からの迫害と差別にさらされた。

「牛肉麺は上海よりも彰化のほうがおいしいね」。

上海で朱實さんはボクに言う。故郷・彰化に対する朱實さんの思いが伝わる。

「米粉の皮のあんかけ肉まん、肉圓（バーワン）も、彰化に行けば、絶対に食べずにおれない地元名物。」

大きな具ととろみが大好き！」と、ボクも言う。

1970年代の日中国交回復に当たって、台湾出身者たちが達者な日本語を生かして、舞台裏で大きな役割を果たしたことは、よく知られていない。

朱實さんは日中復交後の上海で、「男はつらいよ」などの吹き替え翻訳から日中映画人交流の通訳まで大奮闘した。朱實さんおらずして「日中映画交流」はない。吉永小百合などは現在に至るまで、朱實さんからの頼みごとを断った事がない。

朱實さんは90歳をとうに越している。一昨年(2017年)、朱實さん会って、1949年の台湾脱出のいきさつも伺った。朱實さんの中国での人生も起伏に富んだものだったろう。台湾老兵とは違った体験と大陸暮らしを、朱實さんにまた伺いたく思う。

台湾、日本、中国を股にかけた人生。朱實さんを支えた、台湾の樹木・ガジュマルのような大きく、志太い根っこが目に浮かぶ。

4、紙芝居のこと

「台湾の紙芝居史」を調べている。1939年10月発行の内山憲尚『紙芝居精義』には、「台湾には紙芝居屋が38名いる」(朝鮮は65名)との紙芝居業者分布図が記載されている。飴売りの紙芝居屋が台湾にもいたのだ。それは、老婦人の「子ども時代の思い出」画集からもうかがえる。また、台湾人を大東亜戦争に動員するための国策紙芝居も作られている。戦中、皇民奉公会の下部団体として組織された「台湾紙芝居協会」が発行した『大東亜戦捷譜』(42年)、『曙の母』(43年)、『捧げる真心』(43年)は、すでに実物を確認している。題名だけは明らかな『島の志願兵』や『サヨンの鐘』(いずれも42年配布)にもめぐり会いたい。

台湾の台南市は古都で、無数の廟(びょう・お宮)と低い家並みと路地の多さが、ボクの体になじむ。毎日、どこかで廟のにぎやかなお祭りとお出会う。

2017年以来、この町で3、4か月間の「中国語紙芝居・小学校巡演、街頭実演」を始めて3年目。ますます「古都暮らし」になじむようになった。滞在ではなく、暮らし。市内中西区に台南市文化局が国内外の作家に提供するゲストハウス「南寧文学・家」があり、そこに滞在、いや暮らしている。正体は紙芝居屋だけど、「作家」の顔、「作家」のフリをしてね。

廟の縁日で紙芝居をして、日本から持参の「水あめセンベ」を売れば、気分は「寅さん」、車寅次郎。いかに客をつかむか、笑いを取るか、駄菓子を売りつけるか—真剣勝負のおもしろさ。はずれて、ガックリ。受けて、ホクホク。

ホントをウソらしく、ウソをホントらしく語るのが、紙芝居屋の語り(騙り)の持ち味。さてさて、創作紙芝居「老兵の春ふたたび」「烏山頭ダム物語」「上海のガジュマルおやじ」なんかを、作る気であるよ。ウソとホントを取り混ぜた「迷作」をね。(終)

<出版案内> 『在日朝鮮人史研究』49号 2019年10月 A5 117頁 2400円+税

特価 2000円でお分けします。送料 160円とも、2160円を<00970-0-68837 青丘文庫月報>にお送りください。

<目次>

戦前期、在版朝鮮人と犯罪—日本人と比較して 塚崎昌之

在日朝鮮人古物商・屑物業取締法令の推移と実体 木村健二

一九四〇年の在日朝鮮人女性接客業就業状況

—第三回国勢調査統計原票第二十一表から 梁裕河

—在日朝鮮人二世のうつ病と社会・政治・歴史状況 金 栄

第九回在日朝鮮人運動史研究会・韓日民族問題学会合同研究会報告

●青丘文庫研究会の記録

月報が2019年7月以来の発行となっていました。この間、メールニュースを発行していました。メールニュース希望の方は、飛田雄一 hida@ksyc.jp までメールをお願いします。月報にのちのちの青丘文庫研究会歴史のために記録を掲載しておきます。

<

<2019年>

7月14日(日) 午後2時～3時、近現代史(鈴木常勝「台湾老兵の朝鮮戦争」、午後3時～5時、在日(佐藤三郎&石塚明子「1969年 神戸商業高校の「一斉糾弾闘争」&その後—教師の立場から」)

<7月27日(土)～28日(日) 日韓合同研究会、東京>

7/27(土) 午後1時～5時(予定)、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター(CAPP) 7/28(日) フィールドワーク、相模湖/関西部会より発表2名、斎藤正樹「在日朝鮮人集落ウトロ・強制立ち退きを克服」、本岡拓哉「戦後、都市の河川敷に住まう在日朝鮮人」

8月は休み

9月8日(日) 在日(14:00～岡崎享子「金時鐘の作品からみる済州4・3-『地平線』(1955)と『失くした季節』(2010)を中心に-」、15:30～川口祥子「李興燮著『アボジがこえた海』の40年—「徴用工」問題を考える」、近現代史(休み)

10月13日(日) 404回在日(14:00～キムソニア「母国修学制度のリアリティ:2010年度修了生の生活史から」、321回近現代史(15:30～姜健榮「現在の北朝鮮文化遺産(平壤と開城)と離散家族」)

11月10日(日) 神戸映画資料館で映画上映等、①「民族の絶叫」8分「66年ぶり高架下で発見された建青のポスター」仮題 約10分(撮影・編集:金稔万) 飛田雄一のトーク、②※神戸発掘映画祭2019の朝鮮映像特集の中から1本(15分～20分) 水野直樹のトーク15分～20分、休憩:10分、③「大都会の海女」1965/30分 康浩朗さんのトーク15分～20分、休憩:10分、④「龍王宮の記憶」(龍王宮プロジェクト製作版)45分(撮影・編集:金稔万)

12月8日(日) 在日14:00～(梶居佳広、「徴用工判決以降の日韓関係をめぐる日本の新聞論調」、近現代史15:30～(堀内稔、「神戸時代のベセル=大韓毎日申報創立者」)

<2020年>

1月12日(日) 在日(安岡健一「在日朝鮮人児童にむきあった公立学校教員の実践:1980年前後の豊中市の事例から」、近現代史(白石正明、「漢学者・草場船山と東アジアの人々との交遊—『草場船山日記』に見る明治10年代を中心に—」)

2月9日(日) 在日(玄善允、「神戸の高校の一斉糾弾闘争と金時鐘」、近現代史(田中隆一「朝鮮人の中国東北移住と『自治』」(仮))

3月8日(日) コロナウイルス関連で図書館休館のため延期



●青丘文庫研究会●2020年4月12日(日)

■第409回在日朝鮮人史運動史研究会関西部会 午後2時～3時半、「雑誌『朝鮮人』23年間の航跡:飯沼二郎・鶴見俊輔と方法としての「座談会」、宇野田尚哉、黒川伊織

■第325回朝鮮近現代史研究会 午後3時半～5時、「シベリア抑留朝鮮人日本軍兵士」 斎藤正樹

※会場 青神戸学生青年センター(阪急六甲下車徒歩3分、JR六甲道下車徒歩10分) TEL 078-851-2760 ※コロナウイルス関連で青丘文庫が利用できない可能性が大了。会場変更をします。ご注意ください。

【今後の研究会の予定】

●5月10日(日) 会場：神戸映画資料館(JR 新長田) 神戸市長田区腕塚町5丁目5番1 アスタくにつか1 番館北棟2F 201 ※国道2号線(または高速高架)と大正筋商店街(たいしょうすじ しょうてんがい)の交差点角にあるエスカレーターで2Fへお越しください。 ※同ビル3Fの中華料理「神戸飯店(こうべはんてん)」さんが目印です。TEL078-754-8039 (FAX 兼)

13:00 会場 14:00 開始、14:05 上映開始

第1部「映像を通して見る! 植民地朝鮮と満州」、『満鮮のたび』(1932年/19分/サイレント)京都市小
学校学事視察団、『朝鮮の愛国日』(1939年/11分) 朝鮮総督府制作、『銃後の朝鮮』(1940年/8分)
朝鮮総督府制作、解説 水野直樹/ *第2部 15:15 上映開始 「映像を通して見る! 海女の記録」、『和具の海
女』(1940年/25分) 演出：上野耕三、『大都会の海女』(1965年/30分) 監督：康浩郎、解説 伊地知紀子
/ *第3部 16:30「映像を通して見る! 在日映像作家のまなざし」『帰国船(ラッシュ)』(1959/12分) 監督：
康浩郎、トーク：康浩郎監督 30分 聞き手 飛田雄一

●6月14日(日)、在日(高野昭雄)、近現代史(堀内稔「朝鮮・写真の先駆者 池運永について」)

●7月12日(日)、在日(岡本昌己「戦後日本演劇に描かれた朝鮮人・韓国人イメージの通時的変化」)、
近現代史(石川亮太)

●8月はお休み ●9月13日(日)、在日(未定)、近現代史(水野直樹「朝鮮人活動家鄭泰重の生涯——
故郷(全羅南道求礼)から京都へ、ふたたび故郷へ——」)

●10月11日(日) 在日(藤永壮)、近現代史(未定) ●11月8日(日)、神戸映画資料館での映画上
映会

●12月13日(日) 在日(未定)、近現代史(未定) ※発表希望者は水野または飛田まで連絡ください。
『在日朝鮮人史研究』執筆は会員限定そして研究会での発表が前提です。希望者は飛田まで連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】 5月号以降の原稿です。締め切りは20日です。石川亮太、梶居佳広、
高野昭雄、李裕淑、藤川正夫、張允植、松下佳弘、三宅洋介、金早雪、高希麗、伊地知紀子、川那辺康一、
廣瀬陽一、高正子、斎藤正樹、土井浩嗣、上田文夫、中川慎二、塚崎昌之、宇野田尚哉、姜健榮、佐野通
夫、三宅美千代、全淑美、太田修、藤永壮、水野直樹、河かおる、本岡拓哉、梁千賀子、山根俊郎、川瀬俊
治、小野容照、樋口大祐、梶居佳広、高木伸夫、長志珠絵、藤井幸之助、黒川伊織、吉川絢子、李月順、高
祐二、李景珉、青野正明、呉仁濟、勝村誠、松田利彦、飛田雄一(思いつくままにリストアップしました。
前倒しで原稿を書いてくださってもOKです。)

【編集後記】

●巻頭エッセイを砂上さんと足立さんから、研究会の発表記録を鈴木さんからいただいていたが、掲載
が遅くなりました。申し訳ありません。

●新型コロナウイルスの影響が大きく2020年度の青丘文庫研究会も不確かがありますが、がんばって
継続していきたいと思います。新年度の会費の振り込みをよろしくお願いします。研究会参加の方はその日
に堀内さんにお支払いください。会費は3000円です。月報の送付、青丘文庫利用に便利な会員証発行の特
権(?)があります。学生会員で「印刷の月報は不要、メールニュースだけでOK」という方はこの会費が
不要です。その旨飛田 hida@ksyc.jp まで連絡をよろしくお願いします。在日朝鮮人史運動史研究会関西部
会の会費は年5000円です。『在日朝鮮人史研究』3冊を入手できます。これは特権でしょう。いずれも<0
0970-0-68837 青丘文庫月報>に振込をお願いします。みなさん、健康に留意してご活動くだ
さい。今後ともよろしくお願いします。飛田 hida@ksyc.jp